

南半球便り（その 55）：ハンター地域訪問

2 月 3 日

ついに、待望のハンター地域を訪問してきました。炭鉱、港、アンモニア製造工場、ワイナリー、そして白砂のビーチ、エメラルド・グリーンと群青の海。魅力つきない出張でした。



ハンター地域の上空写真

1. 車で 5 時間半

ハンター地域は、ニュー・サウス・ウェールズ（NSW）州の東部、シドニー大都市圏の北方に位置する人口約 66 万人、面積約 22,700 平方キロ（九州の約 3 分の 2）の広大な地方です。その中心がニューカッスル。キャンベラからは直行便がほぼなく、高速鉄道は今後の課題なので、車で約 5 時間半のドライブになります。



ハンター地域の位置（NSW 州政府ホームページ掲載地図を編集）

日本の感覚では、「そこまでして出張するの？」という感じかもしれませんね。でも、広大な豪州大陸では、これくらいの自動車移動は日常茶飯事。そう、豪州で有名なシンガーソングライターのポール・ケリーのヒット曲に、メルボルンからシドニーまでのバス旅行のシーンで始まる一曲があります。歌の冒頭、13 時間にわたる長旅の間「顔を車窓に押しつけて、通り過ぎる道路の白線を見ていた。」という一節があります。

私はといえば、かなたに広がる原生林を眺めては、愛しいカンガルーやコアラの姿を探し求めるか、惰眠をむさぼっていました（笑）。

2. ニューカッスル



美しいニューカッスルの港

キャンベラを日曜日午後 3 時に出てニューカッスルには夜 9 時に到着。港沿いのホテルに宿を取りました。豪州東海岸随一の港町。潮の香りに包まれ、夜遅くまでタグボートや巨大な貨物船の汽笛が海を渡るそよ風に運ばれてくる、のどかな町でした。

ちなみに、山口県の宇部市と 40 年以上の姉妹都市関係にあります。シドニーから紀谷総領事、ジェトロの高原所長、石油天然ガス・金属鉱物資源機構（JOGMEC）の片山所長に参加してもらいました。

翌日、NSW 政府とニューカッスル市のご厚意により、ヘリコプターに搭乗して上空から港や周辺地域を視察。長年 NSW 産石炭の日本への積み出し港として大活躍してきた港の施設、隣接する貯炭場の圧倒的なスケールに目を丸くしました。



ヘリコプターによる上空視察

興味深かったのは、石炭関連施設のすぐ横では、アンモニア製造施設が稼働していること。気候変動問題への対応を念頭に置きつつ、時代の変化に適応した形で地元の経済活動を維持していこうとする強い意志と粘り強い努力、そして石炭貿易で培った信頼関係をベースにアンモニアや水素でも日本とパートナーを組んでいこうとする意欲をひしひしと感じることができました。

ハンター地域では今、既存の産業インフラを基盤に、州内最大の水素ハブ形成に向けて具体的な取組が着々と進められています。今回の訪問に合わせて、同地域の多様な産業を紹介する日本語版ビデオを作成してくれました【[こちら](#)をご覧ください】。

3. 海、そして海

それにつけても、豪州の主要都市を訪れるたびに感じるのは海が存在です。シドニー、メルボルン、ブリスベン、アデレード、パース、ダーウィン。どの町をとっても、海と

は切り離せません。

まさに、ニューカッスルもそうでした。石炭の積み出し港というイメージとは裏腹に、ヘリで一步洋上に出ると、陸地近くはエメラルド・グリーン、遠くは群青に輝く南太平洋が悠然と広がっているのです。



美しく広がるエメラルド・グリーンの海

白い波を立ててイルカの群れが涼しげに遊んでいるありさまを上空から見たとき、長旅をおしてハンターに來た甲斐が十分にあったと思いました。

4.「我が谷は緑なりき」

その夜は、ハンター・バレーのワイナリーでの夕食会に招かれていました。車ではニューカッスルから一時間以上かかる距離でしたが、日程が詰まっていたために再びヘリでの移動がアレンジされました。このフライトも、非常に勉強になりました。

ハンター・バレーと言えば、豪州を代表する炭鉱。そこここに露天掘りを進めている巨大な炭鉱が見受けられた一方、露天掘りを終えた箇所では植林を進め、一面の深い緑が広がっているのです。そして、その先には、幾重ものワイナリー。

こうした光景を機中から目の当たりにし、「豊饒の海」（私の愛読書です！）ならぬ「豊穰の谷」という言葉が思い浮かびました。近く日本大学がニューカッスルにキャンパスを開設しようとしていることも、大いにうなずけました。

5. 豪州ワインを日本に！

夕食会の会場となった LEOGATE では、オーナーのご厚意により、自慢の BROKENBACK 銘柄のワインを次々に堪能させていただきました。忘れられない夜になりました。



ハンター・バレーのレオゲート・ワイン

私のスピーチ【[こちら](#)をご覧ください】でも指摘したのですが、これだけの質を誇るワインがありながら、日本市場では豪州ワインの存在感はいまいちです。市場シェアでは、第一グループは、仏、伊、チリ。第二グループは米国とスペインという構図であり、豪州は出遅れているのです。

ハンター・バレーに加えて、南オーストラリア州バロッサ・バレーのペンフォールズ、西オーストラリア州マーガレット・リバーのルーウィン・エステートなど、豪州ワイン通であれば誰しもが知っている銘酒が英国、シンガポール、中国などで愛飲されてきたことを考えると、日本の状況は誠に残念です。

今回の出張をアレンジしてくれた NSW 州日本代表のマイケル・ニューマン氏と協力しつつ、豪州ワインを日本の食卓に届けていきたいものです。

山上信吾